



山元 眞

発達段階がある

物事には順序がある。人の成長には過程がある。人は一足飛びに大人になるわけではない。母親の胎内で細胞分裂を起こしながら、人になっていく。そしてこの世界に生まれ落ち、発達、成長を遂げていく。一般的に乳児期、幼児期、児童期、青年期を経て大人へと成長していく。これらの一つ一つの大切な発達段階を踏まえながら人は成長していくのである。

発達段階を無視することはできない

発達段階を無視することはできない

い。しかし、人は無視しないまでも、それを急いで飛び越えようとする。近年、幼稚園でもコンピュータを導入するところがある。導が、どうだろうか。例えば、絵を描く場合

鉛筆やクレヨンの匂い、その感触。光のあたり具合によって色がどのように変化するのか、絵の具で汚れた時、どうやってそれを落とすかなど、そのようなことはコンピュータで体験して学ぶことはできない。例えば、

親の期待・子の裏切り

遊ぶ場合…泥遊びは、け

っして汚い遊びではない。泥に触れながら「ざらざら、さらさら、ぬるぬる」などの感触を体験し、学ぶことができる。汚れること、きれいにすることも学ぶ。例えば、人とのかわり…。父親、母親、兄弟、姉妹、友達、先生それぞれにかかわり方がある。それは、実際にそのような人とかかわらない限り、人間関係を学ぶことはできない。このような当たり前のことが無視されたり、軽視されたりして

いる。一つ一つの段階を経てはじめて次の段階に進むことができることを忘れ、何でも急ぐとしていないだろうか。

親は期待する

親は子どもに期待する。何を期待するのだろうか。あるアンケート調査によれば、親が子どもに言う言葉でもっとも多いものは「早く」という言葉らしい。朝、起きた時から夜、

休む時まで「早く」という言葉が乱れ飛ぶ。早ければ、早いほどいい」といのが今の価値観。一つ一つの発達段階をじっくり歩んでいる子どもたちにとって、この価値観は合っ

はずもなく、ただの押し付けになってしまふ。また、なんでも「一番」がいいという価値観。もともと、みんなが一番になれるはずもないのに、そのことが求められる。これも、子どもたちにとっては酷なことであ

る。親が子どもに何かを期待し、その通りにいかない時、親は子どもに裏切られたと思ってしまう。自分が子供に過剰な期待をしていて「裏切られた」はない。もともと無理な要求や期待をしていて、それができないからといって「裏切られた」はない。むしろ裏切っているのは親の方ではないだろうか。「スローライフ

（ゆっくり生きる）」が叫ばれているが、この運動は人間が人間らしくなるために必要なことだと思っ。何でも本物になるために必要なことだと思っ。何でも本物になるた

めには時間とそれなりの労力がいる。人間が人間になるためには、特にそである。

教会でも

教会でも、人間の発達段階に目を向けることが必要ではないだろうか。赤ん坊は何かを知らせるために泣くものである。赤ん坊や幼児が聖堂でいつも静かにできるはずもない。親の言うことを素直に聞いてい

た子どもでも、ある時期から反抗するようになるものである。中学生になっても静かに黙って親の言うことを素直に聞く方が珍しい。実際は、そういうものなのである。周りの者は、まず、それを受け止めなければならぬ。理想ばかりを追い求め、できないことについて「ダメ」とばかり言い、相手の立場に立って考えることができない。自分が幼児だったら、自分が児童だったら、自分が青年だったら…という立場に立って

考える時、彼らの置かれている状況や気持ちが少ないに分かってくるだろう。司祭も、自分が信徒だったらとか、自分がキリスト教について知らない者だったらとか、相手の立場になると、もっと見えてくることがあると思っ。誰かに何かを期待するとき、果たしてそれが、その人にとって心ざわしいことであるのか、よく考えなければならぬ。でなければ、相手から「裏切られた」と勝手に思うようになり、人間関係はますます

まぶくなっていくだろう。(福岡教区司祭)